

教職を目指す学生が学ぶキャリア教育(実践報告)

明星大学理工学部総合理工学科 特任教授 神 田 正 美

抄録

新学習指導要領ではキャリア教育が重視され、小学校段階から継続的にキャリア形成を図ることとなった。しかし、現大学生は、中・高校生時代に人生の生き方、働き方について十分な指導を受けていたとは言えない。教育学部3年生にとって目下の課題は、教員採用試験を含めた進路選択である。教職に対する意識が高い一方で、就職への不安を抱える3年生を対象に、「特別活動の指導法(中高)」の授業で、キャリア教育の在り方を考えた。大学生自身にもキャリア教育は必要であった。

キーワード キャリア教育 教職 働き方改革

1 はじめに キャリア教育の授業

筆者は教育学部3年生を対象にした「特別活動の指導法(中高)」という講座を担当している。今年度の履修者は、前期60人、後期80人、計140人である。中学校の特別活動を中心に教えるため、その内容は「学級活動」「生徒会活動」「学校行事」となる。キャリア教育は「学級活動」の項目中で2コマを使って教えている。

授業内容は次のような概論から入る。

これまで中高の進路指導は「出口指導」に重点が置かれていた。つまり、中学校では、卒業後の進路(ほとんどの生徒にとって、どの高校に進学するか)を指導する。高校では、卒業後の進路(就職先、進学先)を指導する。どちらも卒業直後の進路を決めることが主目的で、いかに生きるか、いかに社会とかかわっていくか、いかに働くかといったところまで十分に行き届いていなかった。新たな「キャリア教育」という概念は、人生の生き方、社会とのかかわり方をキャリアと考え、そのキャリア形成を促す教育である。新学習指導要領では、小学校からキャリア教育を重視する。特別活動では、キャリア教育は学級活動の内容として組み込まれている。

概論を説明した後、「どのようなキャリア教育(進路指導)を受けてきたかを思い出そう」と問いかける。

2 学生が体験したキャリア教育

中高のキャリア教育を振り返って、履修者が書いたものから抜粋する。

A 私がいた中学校はわりと手厚いものだったと思う。中1の時に職場見学、中2の時に5日間の職場体験、中3の時に卒業して働いている人の話を聞く会など、たくさんの機会があったり、保護者と一緒に講話を聴いたり、進学すること、働くことに対しての意識づけはたくさんあったから十分だと考える。

B どっちかというと、この成績だとこのレベルだ、ここは厳しい、などといった、いわゆる出口指導が多かった。自分がどうなりたいか、どのような職業に就きたいかといったことを考える機会があまりなかったため、どのように進路を考えていけばよいのかが分からず、結局成績で進学先を決めてしまった。

Aのような記述は少なく、Bのような記述が多い。振り返りをもとにキャリア教育の在り方について考えていく。すると、3年生は自然と、就職について考えるようになる。中・高校生にキャリア教育を教える立場の自分自身が、果たして自分の進路を深く考えて生きてきたのだろうか和内省するからである。

3 講座履修者の職業意識調査

履修者の職業に関する意識を把握するために、1コマ目にアンケート調査を行った。(図1、2)

このアンケート調査は『平成24年版 子ども・若者白書』を参考にしている。『白書』の特集は「若者の仕事観や将来像と職業的自立、就労等支援の現状と課題」である。そこに記された日本の若者の職業意識に注目した。講座履修学生の意識はその調査に現れた若者の意識と共通しているのか、あるいは相違点があるのか、という関心から、白書に取り上げられたアンケート調査と同じ質問を履修学生に問うてみた。

基になる調査は2011年(平成23年)12月から翌年1月までの間、インターネット調査会社の登録リサーチモニターである全国の15歳から29歳までの男女3,000人(男性1,500人、女性1,500人)を対象にしたインターネット調査である。大学3年生は20歳前後であるので、本調査中の比較対象者として年齢区分15～24歳のデータを採用した。(注)

明星大学教育学部3年生で、「特別活動の指導法(中高)(神田担当)」を履修しており、アンケートに回答した学生117人(以後、履修3年生とよぶ)と、先の調査中の15～24歳(以後、全国の若者とよぶ)とを比較してみる。

○何のために仕事をするのか

何のために仕事をするのか(二つまで選択可)を見ると、全国の若者も履修3年生も、ともに1位が「収入を得るため」、2位は「自分の生活のため」となっている。しかし、その割合は、履修3年生の方が全国の若者に比べて低くなっており、生活費を稼ぐ、生活を成り立たせるという問題よりも、他の項目に関心が向いていることが分かる。では、どのような項目に関心があるのかというと、「仕事を通して達成感や生きがいを得るため」「自分の夢や希望を叶えるため」「多くの人の役に立つため」という順になっている。他者との関わりの中で自己実現を図りたいという目的意識があることが見える。教育学部で学ぶ学生の特徴が現れているといえるだろう。(図1)

○どんな職場で働きたいか

『白書』では、総務庁青少年対策本部が1995年(平成7年)11月～12月に行った「日本の青少年の生活と意識…青少年の生活と意識に関する基本調査報告書」を紹介している。この調査は15～24歳の男性853人、女性963人、計1,816人を対象にしたものである。どんな職場で働きたいかについて、大切なものを三つ回答する形式の問いである。履修3年生117人に、同じ質問を問うた。全国の若者と履修3年生とを比較すると、時代の変化と学部生の特徴とが相まって大きな変化が見て取れる。

全国の若者に比べ、履修3年生の回答の割合が低いのは「自分の才能が生かせる職場」「収入が多い職場」である。このことは、履修3年生は教員を目指しているために、そもそも自分の才能を生かすことが前提になっており、教員になれば才能が生かされないという心配が少ないからだと考えられる。また、収入も民間企業に就職するよりは安定した収入が保証されているために関心が低くなったと考えられる。

一方、全国の若者に比べ、履修3年生の回答の割合が高いのは「人間関係がよい職場」「休暇がきちんと取れたり残業があまりない職場」「福利厚生面が充実している職場」である。このことは、総務庁の調査が行われた1995年当時ようやく問題になり始めた過労死が、いまや国を挙げて解決すべき課題となっていることと関係しているだろう。さらに、学校がブラック企業であると言われ、マスコミでいわばネガティブなキャンペーンが進んでいるここ数年の状況も反映していると思われる。(図2)

図1

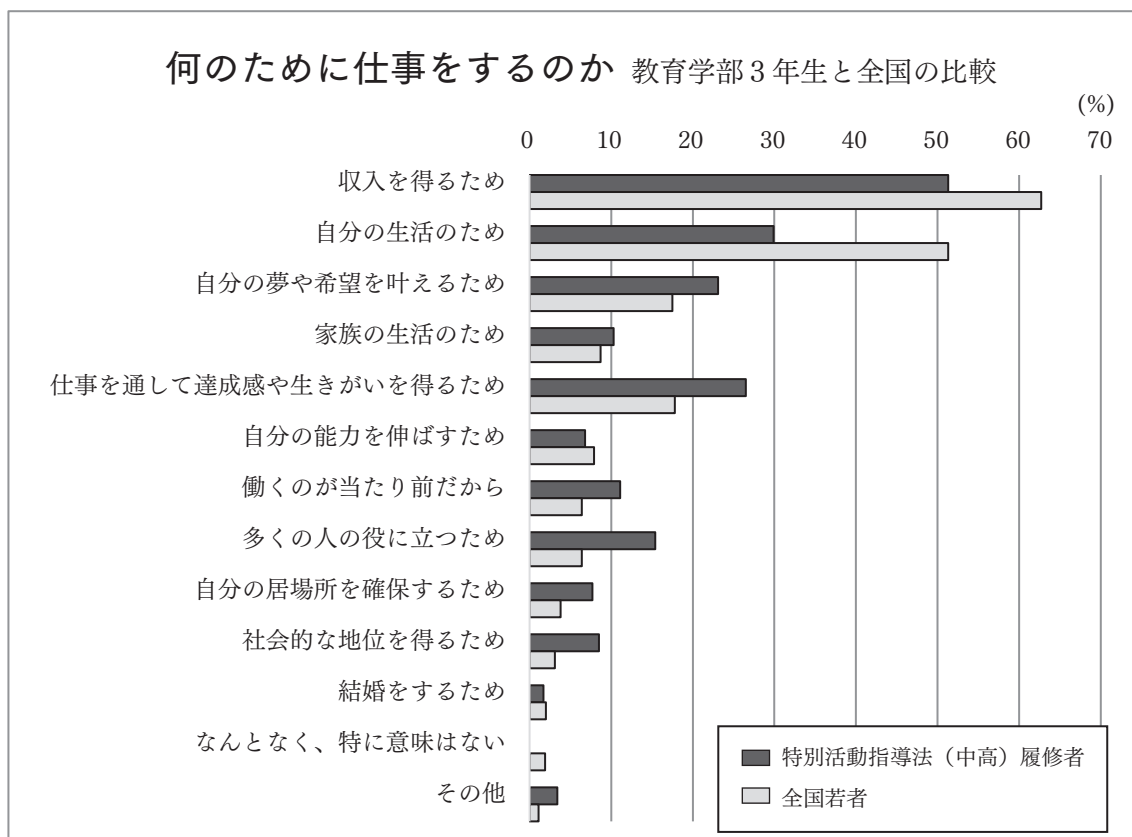
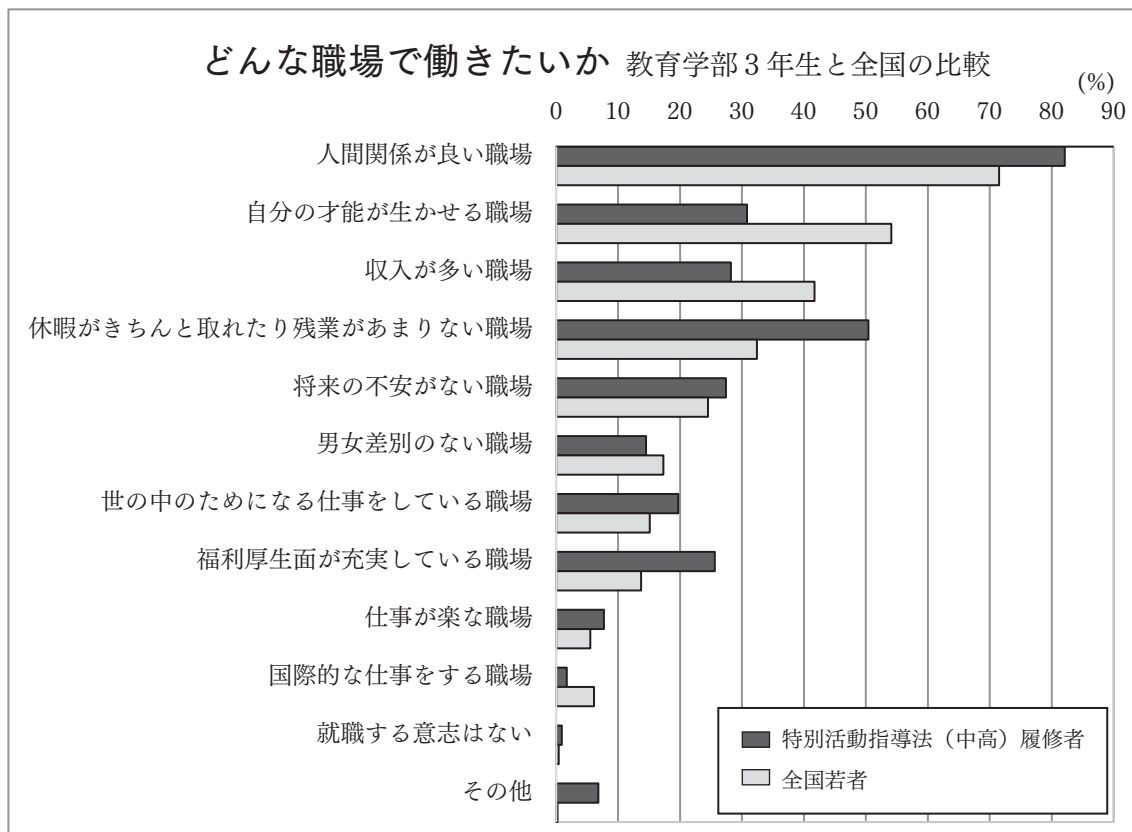


図2



4 履修者(教育学部3年生)の心理

授業内で、グラフを示し、その分析も行った後、3年生に対して「自分の進路選択についてどのような希望や悩みをもっていますか」と尋ねた。3年生は素直な気持ちを綴っている。

- ずっと昔からの夢だった中学校教師になりたい気持ちはまったく変わらないが、ブラックだとか、休みが無くて残業もすごいと聞くと、それは本当にやりたいことなのか不安になる。
- 教師になれば教育学部に入った意味が無くなってしまい、私たちは教師以外に道が残されていないので辛い。
- 大学の先生の話の聞いたり、実際に子供と関わったりすると楽しくてたまらない。人の役に立ち、自分もやりがいを感じる先生という職業に希望をもっている。しかし、近年いじめ問題や学校のブラック企業さながらの職場環境の話の聞き、自分でも対応できるのか不安になっている。
- インターンシップに行って、本当に教員になって、子どもたちに一生をかけるのかと不安になって、民間企業のインターンシップに行ってみた。でも正直やりたいことはなく、やはり教員がいいかなと悩んでいる。(略)進路がなかなか決まらない。
- 新卒の離職率が高いことが不安。ノイローゼにならないか。年配の先生が怖い。
- 小学校教員を目指している。まだまだこれから学ぶことがあるのは分かっているが、仮に来年教採に合格しても、本当に教員として頑張っていけるか不安である。なりたい気持ちは大きいですが、本当に向いているのかが分からない。
- 周囲の勧めや親の勧めによってここまで来たものの、明確な教員志望の理由がなく、輝かしい理由をもって教員を志望している大学生がまぶしい。こんな私が教員志望でよいのか、という不安、というより疑問…。
- 自分はまだ21歳のクソガキであり、人生経験も少ない。一度一般企業に就職して、それから先生を目指した方がよいのか悩んでいる。

3年生の後期になっても、不安が大きいことが窺える。その内容を分類すると、次のようになるだろう。

- ①教員採用試験に合格できるかどうか分からないという心配。
- ②社会人になることに対する自信のなさ。
- ③自分の能力や適性が自分でもよくわからないことからくる漠然とした不安。
- ④ブラック企業とよばれる学校に就職することの怖さ。

5 不安を抱える3年生への語り

大学3年生の後期になっても、まだ進路が絞り切れないのは、明星大学教育学部以外の学生と比較しても他大学の学生と比較しても、遅いだろう。教員採用試験を受けるならば、すでに受験勉強を始めていなければならない時期である。教職センターの様々な取組にもかかわらず、学生の気質はまだ甘いといえる。

しかし、若者特有の、人生の悩みに向き合う姿勢は大切にしたい。先に示したように心情を素直に表現している学生は好ましくもある。昨年も同様の状況であった。そこで、キャリア教育2コマ目は、大学教員が大学生に対してキャリアガイダンスを行うという内容にした。筆者が3年生に語ったのは次のような話である。

ここは教員を目指す人が学ぶ学部である。当然、教員になったらどう行動するか、どのようにすれば教育効果が上がるかということが授業で教えられる。3年生になって、自分は教員にならないと決めた人は、

その決定を大事にしてよい。ただし、教員にならない人がいるからといって、授業内容を変えることはない。こちらは、これからいっそう君たちが教員になるための勉強を強化していく。

今、教員になるかどうか悩んでいる人は、その悩みのもとが何かをしっかりと見つめよう。自分に自信がないという人、自分の適性が分からないという人が多い。しかし、自分が本当にどんな人間かよくわかっている人が世の中にどれだけいるだろう。自信がないのは謙虚だから、まじめだからだと思う。悩むのは若者の特権だ。悩んでいる人こそ、子どもたちの悩みに寄り添えるのではないか。あなたが生徒だった時に、あなたの悩みや不安に気付いてくれた先生がいたはず。そんな感度の良い先生になれる素質をもっていると考えてほしい。

ブラック企業と言われる学校については、これだけ、社会問題になっているのだから、必ず改善される。しかも、働き方改革の意識をもった教員が、先輩、同僚にたくさんいるはずだ。一人で問題を抱えることはない。働き方改革を推進する役割を自覚して学校現場に行こう。

採用試験に受かるかどうか分からないという人は、果報は寝て待てという態度ではなく、努力しなければ事態は何も変わらないということを改めて自分に言い聞かせよう。

もう悩む時期ではない、とにかく決めて進もう。人生は長い。やってみなければ分からない。

といったようなことを、20歳過ぎの学生に向かって語ったのである。

6 学生の反応

こちらが真剣に語っても、受け取り方は様々であろうとは予想していた。黙って聞いていた学生の感想である。

○進路の話で今までで一番参考にならなかった。

という批判的な意見がある。大学生に向かってやはりお説教じみた話をすべきではなかったかと反省する。しかし、次のような感想もある。

○先のことはだれにも分からないので、その時、その時を一生懸命に生きたいと思います。中学3年の先生に「あまり卒業後に遊びに来てはいけないよ」と卒業の際に言われました。そこで先生が言っていたのが「たくましさ」なんだと思います。ありがとうございました。

○自分自身で切り拓いていかないといけないことが伝わってきた。人生がどうなるかは本当に分からないことも伝わってきた。ゆっくりでもよいから進み続けることを実践していきたい。

○もう2年後には社会に出るとなると、この短い期間で自分の将来に向かって考えないといけないと思う。今までの中で一番難しい進路決定。望ましい進路指導は生徒に寄り添い一番に考えてあげること。生徒の気持ちを忘れない。

○「未来を知ることとはできなくても、なりたい仕事への準備をすることはできる。今やるべきだと思うことをコツコツやっていくしかない。今頑張ったことは無駄にはならない」という言葉を覚えておきます。

7 おわりに

教員採用試験の倍率が下がり、教員になる好機だと言われている。しかし、採用試験に受かるという保証はだれにもない。大学卒業、就職は教育学部生にとって初めて味わう大きな試練である。不安も大きい。しかし、教員を目指すからこそ、感情をコントロールして力強く試練に立ち向かっていかなければならない。その体験が教員の資質・能力を養うことにつながるはずだ。特別活動の指導法(中高)では、自らの

人生を切り開いていく生き方について今後も考えさせたい。教育者になる若者にもキャリア教育が必要である。さらに授業内容を研究して、優秀な教員を養成していきたい。

注

『平成24年版 子ども・若者白書』pp.64-65

この調査の回答者は男性1,500人、女性1,500人、計3,000人。

回答者の年齢による属性は、15～19歳(30.4%)、20～24歳(32.4%)、25～29歳(37.1%)。

回答者の居住地による属性は、北海道(4.1%)、東北(6.6%)、関東(34.3%)、中部・北陸(18.3%)、近畿(16.5%)、中国・四国(8.7%)、九州・沖縄(11.7%)。

現在の職業による属性は、正規雇用(常勤)(22.3%)、アルバイト・パート・嘱託・非正規雇用(非常勤)の仕事(派遣・契約社員を含む)(13.3%)、自営業・自由業(2.3%)、専業主婦(主夫)あるいは家事手伝い(9.3%)、学校に在学中(48.0%)、いずれの仕事もしていない(4.8%)。